

《中学生の部》

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）

愛媛県松山市立南中学校

1年 大脇 理緒

後悔の前にできること

私が小学年の時、祖父が交通事故にあった。母から事故のことを聞いた時、私がまず一番に考えたのは、祖父が今どこにいるのかということだ。私の心臓はドキドキし、不安と恐怖でたまらなかった。おそるおそる母にたずねると、

「じいじは、病院にいるよ。大丈夫。」

全身を強く打ったけれど、ヘルメットのおかげで助かったらしい。ヘルメットがなかつたらと思うと、頭がまっ白になってしまった。

どのような事故だったかというと、信号のない交差点を自転車で直進していた祖父に、左から直進してきた車がぶつかったらしい。車が走行していた道路に一時停止の線があつたにもかかわらず、車は一時停止しなかったため事故がおきたそうだ。私はその話を聞いて、疑問に思うことがあった。それは、車の運転手も自転車に乗っていた祖父も左右の確認をしなかったのか、ということだ。事故があった場所に連れて行ってもらったのだが、とても見晴らしのよい交差点だった。車も自転車もお互いに気付けたはずなのに。

防ぎようのない事故もあるかもしれないけれど、防げたはずの事故も多いのではないかと思う。今回の事故だって、車がきちんと一時停止し、左右の確認をしていれば、事故はおきていらない。祖父が走行していた道路が優先道路だったとしても、速度をゆるめない車を確認できたなら、自分が止まれば助かっていた。もしかしたら、車が一時停止するはずだと、祖父は直進したのかもしれない。交通ルールを守るのは当然のことだけれど「だろう」「はずだ」そんな勝手な思い込みや決めつけが事故につながるのだと思う。「かもしれない」そんな気持ちをみんなが持てば、防げるはずの事故はゼロになるのではなかうか。

この事故で、改めてヘルメットの大切さを感じている。祖父のヘルメットは割れて、自転車は曲がってしまったけれど、祖父は奇跡的に助かった。割れたのはヘルメットだったけど、もしかぶっていなければ、割れていたのは何だったのか。私は自転車に乗る時、ヘルメットをかぶってアゴひもをしめていないことがあったのを、深く反省している。正しくヘルメットを着用しなければ意味がないのだ。

命を守るために、できることはたくさんある。ヘルメットもそうだが、早めにライトを

つけるようにしている。母と車に乗っていた時、無灯火の自転車や歩行者にはっとしたことがあります、自分の存在に気付いてもらうためにも、カバンには反射板のキーホルダーをつけて、早めのライトを心がけている。さらに、青信号で横断歩道を渡る時も、必ず左右の確認をしている。後悔をする前にできることはできる限り実行し続けたい。事故にあってからでは、取り返しがつかないのだから。